

とみ茶屋まじ



茶屋あり

川口松太郎

講談社版

しぐれ茶屋おりく

昭和四四年五月二四日 第一刷発行
昭和四四年七月 四日 第二刷発行

著 者 川口松太郎

発行者 野間 省 一

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽二一二一二

郵便番号 一一二

電話 東京(九四二)一一一一(大代表)

振替 東京三九三〇

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 黒柳製本株式会社

定価 六二〇円

© Matsutaro Kawaguchi 1969 Printed in Japan

落丁本・乱丁本はお取り替えます。

(分) 0-0-93 (製) 122986 (出) 2253 (0)

目次

第一話	隅田川春秋	七
第二話	天麩羅そば	三
第三話	浅草観音さま	七
第四話	湯島の琴	一七
第五話	名人鉄	二四
第六話	名人鉄と市村羽左衛門	二七

第七話

新曲「春怨」上の巻

三二

新曲「春怨」下の巻

三三

第八話

紀之助浄瑠璃

三七

第九話

春色みやこ鳥

三三

第十話

芸の道は還らず

三五

題字 川口松太郎
挿絵 岩田専太郎
造本 原弘

しぐれ茶屋おりく

第一話

隅田川春秋

「その頃の東京はようござんした」

と目を細めていったのは昭和初年の、おりくが六十二三歳、信吉がまだ二十七八、四十数年の昔だ。

「何しろ、うちの庭から大川へ糸を入れるとすずきが釣れたんですからね。上げ潮に流されてこんなところまで上って来たんですよ。夏は栈橋からぼちゃんぽちゃん飛び込んで、泳ぐというより水を浴びたもんなんです。そういっただけでも、隅田川がどんなにきれいだったかお判りになるでしょう」

と往時をなつかしんでは慨嘆し、よごれ行く東京の風景を悲しがる。信吉も同じ浅草生れだから明治時代の隅田川の水の美しさは知っている。夏になると牛の御前（牛島神社）から言問あたりにまでは一めんの水練場になって、子供たちの泳ぎの練習所になってしまふ。

「昔の東京を考えて何よりも悲しいのは川の水の汚なくなったことだよ。世の中がどんなに変わったって、いくら文明が開けたって、大川の水だけはどうかならないものかね。こんな川ならいっそ埋めたてて公園にでもするがいいじゃないか」

と顔色を変えて真剣に怒って、隅田川が埋めたて得ると思っている。

「その代り夜になると狸が出て来たり、貉むじなが爺やを驚かしたりするんだから、若い娘は勤まらなかつた。自動車なんて便利なものがない時代だから、夜になって外へ行く時は、ぶら提灯を下げたり、四五人が手をつないで土手を上ったり、いやもう大変な騒ぎだった。遅くなると人力も来ないし、向島の土手は九時をすぎると、人っ子一人通らなかつたんだよ」

おりくの店の「しぐれ茶屋」は寺島村の一部の、大川沿いの芦の中にある。向島の土手は枕橋から言問までが一直線の川沿いになっているが、言問団子の前を右折して、長命寺の角を左へ曲るとあとはおだやかな田圃たんぼ中で左手は沼地の中の芦原つづきだ。その頃の土手は土塁を盛上げたように高く築かれ、幹の太い桜樹が両側に並んで、花どきの美しさはもとより、花の散つたあとの葉桜もすがすがしく、四季おりおりの眺めにそれぞれの変化があった。花の盛りに花見客が浮かれるのは、枕橋から言問までの川沿いで、土手の片側には葭簀よしすがけの茶店が出て、店の名を書き込んだ花のれんを川風にひるがえして客を呼ぶ。

茶店といっても只の休み茶屋ではなく、東京名代のすし屋だとか、小料理屋だとか、下戸のためのしるこ屋など、いずれも名ある店の掛け小屋ばかりで、好い御機嫌の酔客が、唄ったり踊ったり、中には芸者を連れて来て唄わせたり、賑やかな笑声が絶え間なく聞えて、まことに華やかな花見の楽園であつた。

然しその騒ぎも言問までで、大川と別れた土手が、長命寺の角から白鬚神社へ行くまでの間は茶店もなくなり、静かな花を喜ぶ風流人の散策地になって、右側は田圃、左は芦の繁る湿原つづきだから花見の華やかさはうすれてしまう。

「しぐれ茶屋」はその芦の中に建てられた風雅な料理旅館なのだ。料理旅館という名もまだない

頃で、料理屋へ客が泊ってもやかましくはいわれない時世だったし、土手の左側に「しぐれ茶屋入口」と書いた道標が立っていて、その下をだらだらとおりると、風雅な枝折門に「しぐれ茶屋」と白字で書いた横額を掛け、芦を刈り取った細い道がうねうねと曲りくねってその先に、茅葺きの「しぐれ茶屋」が建っている。

外観は農家風だが、内部は贅沢な数寄屋造りで、座敷は大小八つあり、家の後方には小粋な離れが四つも建っている。料理は海の魚を使わず、隅田川でとれる鮎、鯉、白魚その他の小魚と精進料理で、料理の最後には伊勢の桑名から取り寄せたしぐれ蛤の茶づけが出る。この蛤がおりくの自慢で、一月に一度ずつ桑名から送らせ東京で味わわれぬほど材料を吟味している。

信吉も食べて知っているが、親指ほどもある大蛤の佃煮で、これを炊きたての飯の上に乗せ、もみのりをばらばらとふりかけて出す。そのまま食べてもよし、茶づけにしてもよし、さっぱりとしてしかもコクのあるうまい茶漬けだ。

信吉は桑名でしぐれ茶づけを食べた経験もあるが、蛤が年々に小さくなり、乱獲の結果はだんだん取れなくなっているのに「しぐれ茶屋」の蛤は、遠くから足を運ぶ者の多い向島の名物で、あんなへんぴな場所ですら繁盛を極めたのだから、如何に美味だったかは、おりくの自慢を待つまでもない。

「うまい食べものとは、どんなものをいうのか今の人は知らないんだよ。鮎のさしみで一杯のんで、海老の天ぷらで飯を喰えばうまい料理だと思っているが、いくらうまかったって刺身や天ぷらは三日つづけて食べられるもんじゃないよ。そこへ行くと、あたしの店のしぐれ茶づけは、三百六十六日食べたって飽きないんだから」

と鼻たかだかにいう。

三百六十五日のところを一日多く六日というところにおりくらしい洒落しやれがあつて、

「それだから皆さんが遠くから食べに来てくれるのさ。伊藤博文さんも来て下すつたし、大倉喜八郎さんも福沢桃介さんも、団十郎も菊五郎も都一中も常磐津の林中も、うまいものを食べあきた連中がみんな来るんだよ」

と鼻はいよいよ高くなる。政治家も実業家も芸人も風流人も、しぐれ茶屋の客は一流人物を網羅わらしていて暖かい飯の上に乗せた大きな蛤は佃煮てんしというほど煮つめたのではなく、熱い茶をかけると、元の蛤に戻つて、ほんのりぬめりを感じさせるほどで、味あじ、色いろ、香かおりと、三拍子揃そろつたうまい食べ物だ。

「あたしがこんな商売をしようと思いついたのも、桑名で食べたしぐれ蛤の味に驚いたからで、あの味を知らなければこんな店もこしらえなかった。料理屋商売が掃いて棄てるほどある世の中だから、よっぽど変つたことをしなければ喜んで貰えないし、何か一つ名物料理を思いついてからやりたいと考えていたところだから、あの時の桑名の蛤は地獄に仏もおんなじだったよ」

と蛤への感謝はとめどがない。この商売を始めるまでは吉原の銀花楼という貸座敷の経営者で、いわば女郎屋のお内儀かみさんだった。

それについてもおりくはこういう。

「もともとあたしや花魁おいらんになるところだったので、生れは遠いんだよ。江戸っ子みたいな顔をしているけれども、ほんとうは上州の田舎者で、十八の時に銀花楼へ売られて来て。今でこそこんなお婆さんになつてしまつたけれども若い時はなかなかどうして、百姓娘には惜しい器量よしで

ね——お笑いでないよ。ほんとの話なんだから」

「今だってなかなかきれいですよ」

と言葉をはさめば、

「駄目だよ。いくら気やすめをいわれたって、鏡の前へ坐ればそれっきりなんだから、こうなっちゃどうしようもないけれども、十八九の頃は目鼻立ちがぱっちりしていて、小柄できりっとしまっていてね。うちが貧乏なんで吉原へ売られたんだけれども、初めて銀花楼へ来た時にはなんにも知らない生娘だったから、いきなり客席へ出すことは出来ないというんで、最初は、主人夫婦の部屋に置かれて、小用を足しながら商売の仕方を教わったんだよ」

そのうちに銀花楼の主人に見染められて手ごめ同様にされてしまい、遊女屋の主人が、抱えの女に手を出すのは堅い法度だったから、とうとうおりくを遊女に出さず、自分の妾に変えてしまった。

「お内儀さんがやきもちやきでね。あたしや全くどうしていいか判らなかつたんだが、旦那という人がなかなか粹な方で、うまい事をいってお内儀さんを説き伏せ、俺もこの年になって見れば、妾の一人ぐらいは囲って置いても可笑しくはあるまい。お前は店が忙しいのだから、俺が外で少しぐらい遊んだって文句はないだろう。素性の知れない女よりもおりくはまだ世間知らずの生娘だから、却っていいじゃないか——と悪びれもせずにお内儀さんを口説き、橋場の別宅へ囲い者にしてくれたのさ。旦那はもう五十を過ぎていたし、お内儀さんも年の違わないお方だったから、あたしが来て五年目にはお内儀さんが亡くなり、橋場のうちから銀花楼へ引き取られて、お女郎屋商売を手伝うようになってしまったところが、それから間もなく旦那も亡くなってあた

しが銀花楼の主人になってしまったんだよ。夫婦には子供がなく、養女に貰ったお糸さんがあたしになつてくれてね」

その後の十五年は貸座敷の女主人で送って、四十になってからお糸さんに婿を取って店を明け渡し、同時に向島の今の場所ですぐれ茶屋を開業したのだ。

「地代はただみたいなものだったけれど、沼地同様のところだから、雨が降りつづくとじくじく水が噴き出る騒ぎでさ、敷地いっぱいに盛り土したのが大そう高くついてしまった。土手をおりて来る時には、ずい分低く見えるだろうけれどもほんとうは土手の高さとおんまり変りがないんだよ。そうでもしなきゃ年中水につかりっぱなしだもの」

と建てた時の苦心をも自慢話にして、

「お糸さんは大反対でね、こんな淋しいところで商売をしたって、誰も来る者はありません。そんなことをするよりうちにいて下さいと泣かんばかりに止めてくれたんだけど、その時のあたしや、もう世の中を棄てる気だった。十九で妾になって、四十までは女郎屋のお内儀さんで夢中で働いて、こんな事で一生を終るのかと思うと何だか世の中がはかなくなってしまうてね。なんかコウ人里離れた場所で、こっそりと暮したい気になってしまつて。といつてただ遊んでいるワケにも行かないから此処をこしらえたんだよ。でも、初めのうちは長つづきをすると思う人はなかった。今とは時世が違って、宣伝ということも知らなかったし、知り合いの方へ手拭配りをして頼みに廻つてさ。そこはまア、長年女郎屋商売をしていたお陰で知り合いが多かつたし、仲の町の引手茶屋がお客さんを連れて来てくれたりしたけれど、あんまり四辺が淋しいので、はるか遠い国へ来たようだとお客さんにひやかされたものさ。乗物の不自由な時代だから、